

高松市林町RT(加入者線多重伝送装置)
設置に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

空港跡地遺跡(亀の町地区Ⅰ)

1995.1

高松市教育委員会
日本電信電話株式会社四国支社

空港跡地遺跡 亀の町地区 I 正誤表

頁	行	誤	正
3	8	浴・長池II遺跡	浴・長池II遺跡
	9	浴・長池遺跡	浴・長池遺跡
	10	浴・松ノ木遺跡	浴・松ノ木遺跡
5	14	掘立柱建物	掘立柱建物
	15	掘立柱建物	掘立柱建物
7		第2図	第2図 調査区の位置

はじめに

高松市は、瀬戸内海に面した優しい地形と、温暖な気候で特徴づけられる自然豊かな都市でございます。しかしながら、豊かな自然も時として、思わぬ災いをもたらします。

平成6年度の今年の夏、本市は、渇水に見舞われました。かつては、讃岐砂漠といわれるほど、干害の常襲地帯ではございましたが、ここ十数年、絶えて無かったことでございます。水の大切さ、水の貴重さを体で知ることができました。本市が水不足と闘ってきたという、歴史を改めて、認識させていただいたというところでしょう。

ところで、今回の調査地である林町は、本市の中でも最も変貌著しい町で、埋蔵文化財調査の事例も多く、古代からの情報も多い町でございます。そうしたことから、林町の新しい古代像が描けるのではないかと、ひそかに期待させていただいているところでもございます。

また、発掘調査情報の集積によっては、古代の水対策が、序々に明らかになっていくでしょう。今回の調査で出土した土器を製作し、使用し、そして破棄した古代人も、私達同様、水に関心をもっていたことに間違いないと思います。

高松平野という同じ土地で暮らした先人に、これまでにない親近感を覚えるものであります。

今後におきましても、そのような気持ちをもちながら、発掘調査を進めていきたいと考えております。

最後になりましたが、酷暑・渇水の中、調査を御手伝いいただきました作業員の方々の苦労は、大変なものがあったと聞き及んでおります。あらためて、感謝の意を表させていただきます。

また、調査の実施に御理解とともに、数々の利便を図っていただいた、NTT四国支社にも深く御礼申し上げます。

平成7年1月

高松市教育委員会
教育長 山口 寮式

はじめに

電気通信は、電話を始めとして電子計算機の相互接続による情報通信ネットワークなど市民生活や産業経済活動に欠くことのできない通信手段として重要な役割を果たしておりさらに、今後のマルチメディアに向けて、一層の発展が期待されています。

このような中にあって、当社は、香川インテリジェントパークの整備に伴う電話回線の増加を見込み、高松市林町に専用R T（加入者線多重伝送装置）の設置を計画し、用地を買収しました。

しかし、高松空港跡地一帯は、文化財保護法第57条「調査のための発掘に関する届出指示及び命令」の指定地域になっていることから、高松市教育委員会にご相談したところご多忙にもかかわらず、発掘調査の実施について全面的なご協力を頂き、深く感謝申し上げます。

さらに、今年は例年になく、猛暑、渇水の中、発掘調査及び整理作業を通じて香川県教育委員会、鷲香川県埋蔵文化財調査センター及び地元の方々等関係者の皆様のご指導とご協力に深く感謝申し上げます。この場をお借りしてお礼申し上げます。

最後になりましたが、今後とも当社をはじめ、電信電話事業に益々のご高配を賜りますよう、併せてお願ひ申し上げます。

日本電信電話株式会社
四国支社
建築企画室
室長 増田健児

例　　言

- 1 本書は、日本電信電話株式会社の高松市林町R T（加入者線多重伝送装置）に設置に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、高松市林町字亀の町2222番地2に所在する。
- 3 調査は、日本電信電話株式会社の費用負担によって実施した。
- 4 調査は、高松市教育委員会文化部文化振興課主事 山本英之が担当した。
- 5 本書の執筆は、第1章を山本英之、第2章を山本・松田重治、第3・4章を中西克也が行い、編集は山本・中西が行った。
- 6 本書挿図中の標高はすべて海拔であり、方位は磁北を示す。また、挿図の一部に建設省国土地理院発行の25000の1地形図「高松南部」を使用した。
- 7 土色等に関しては、『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財团法人日本色彩研究所 色票監修 1989年)を基準とした。
- 8 発掘調査、整理作業を通じて日本電信電話株式会社四国支社、香川県教育委員会、眞香川県埋蔵文化財調査センター、地元の方々その他関係各位より多大なご協力、ご援助を得た。

空港跡地遺跡（亀の町地区Ⅰ）発掘調査報告書

目 次

第1章 調査に至る経緯と調査の経過

第2章 遺跡の立地と環境

- 1 地理的環境
- 2 歴史的環境

第3章 調査の概要

- 1 調査区の位置
- 2 基本層序
- 3 遺構・遺物
 - (1) SD01
 - (2) SD02
 - (3) SD03
 - (4) SD04
 - (5) SD05
 - (6) SD06
 - (7) SX01
 - (8) 近代の遺構

第4章 まとめ

報告書抄録

挿 図 目 次

- 第1図 遺跡の位置と周辺遺跡分布図
- 第2図 調査区の位置
- 第3図 土層断面柱状図
- 第4図 遺構配置図
- 第5図 SD01実測図
- 第6図 SD01出土遺物実測図
- 第7図 SD02・03実測図
- 第8図 SD04・06実測図
- 第9図 SD04出土遺物実測図
- 第10図 SD05実測図
- 第11図 SX01実測図
- 第12図 SX01出土遺物実測図

図 版 目 次

- 図版1-1 調査前遠景
- 調査前近景
- 遺構検出状況
- SD01
- SD01土器出土状態
- SD02・03
- SD04
- SD04土層
- SD05
- SD05土層
- SD06
- SX01
- 完掘状況

第1章 調査に至る経緯と調査の経過

平成元年12月の高松新空港開設に伴い閉鎖となった高松空港跡地は、県有地に移管された直後の平成3年度から工業試験場、県立図書館、大規模見本市会場、民間企業の技術系施設等を集積する香川インテリジェントパークとして整備が進められ、平成5年度以降順次新施設が開設されつつある。

これらの空港跡地の再開発区域周辺は、高松平野中央部の田園地帯で条里制の地割がよく保存されていることで知られるとともに、近隣の高松東道路建設、太田第2土地区画整理事業等に伴う埋蔵文化財調査の結果から、歴史的な価値がより注目されている地域でもある。その中にあって、空港跡地の部分は、飛行場建設のために埋蔵文化財の遺存は疑問視され、遺跡の空白地帯とされてきたが、徳島県埋蔵文化財調査センターによる、再開発に伴う事前調査によって、弥生集落、中世館跡、条里閑道遺構等が滑走路の下から続々と発掘され、空港跡地遺跡として大規模な調査が実施してきた。

一方日本電信電話株式会社四国支社では、香川インテリジェントパークの整備に伴う電話回線の増加を見越して、林町字亀の町2222番地2に専用RT（加入者線多重伝送装置）の設置を計画し、予定地が空港跡地遺跡に含まれることから、RT設置に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて高松市教育委員会に照会した。これを受けた高松市教育委員会では、試掘調査を実施した香川県教育委員会に問い合わせたところ、すでに埋蔵文化財包蔵地として確認しているため事前調査が必要で、調査については高松市教育委員会で対応するようにとの指導を得た。

このため、日本電信電話株式会社四国支社と高松市教育委員会の二者で協議を重ね、日本電信電話株式会社四国支社が費用を負担し、高松市教育委員会が発掘調査を実施することを内容とする協定書を、平成6年5月9日付けで締結した。

発掘調査は平成6年5月14日に着手し、6月22日をもって現地調査を完了した。そして同年7・8月で引き続き整理作業を実施し調査報告書の作成にあたった。

第2章 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

高松平野は、香川県のほぼ中央部で瀬戸内海沿岸に位置する沖積平野で、西を五色台山塊、南を日山、上佐山、東を立石山、雲附山等にさえぎられており、南北約20km、東西約16kmをはかる。

平野の境界を画する低位山塊及び島嶼、紫雲山等の島状の独立丘陵は、侵食の容易な花崗岩層（三豊層群）が風化侵食に抵抗の強い安山岩層に覆われたことによって侵食解析から取り残されて形成された、メサ、またはピュートと呼ばれるもので、讃岐のどかな田園風景の象徴のひとつとなっている。

高松平野には、西から本津川、香東川、春日川、新川といった河川が北流しているが、なかでも香東川が平野の形成に最も大きな影響を及ぼしており、現在の春日川以西が香東川による冲積平野といわれている。

現在、石清尾山塊の西側を直線状に北流する香東川は、17世紀はじめの河川改修によるもので、それ以前には石清尾山塊の南側から回り込んで、平野中央部を東北流するもう一本の主流路が存在していた。この旧流路は、現在では水田地帯及び市街地の地下に埋没してしまっているが、空中写真等から、林から木太地区にかけての分ヶ池、下池、長池、大池、ガラ池を結ぶ流路等数本の旧河道が知られており、発掘調査でもその痕跡が確認されている。なお、17世紀の廃川直前の流路は、御坊川として今でもその名残をとどめている。

これらため池は、年間1000mm前後と降水量に乏しい讃岐平野において農業用水確保のために不可欠のものであるが、林、多肥地区周辺では扇状地末端部にあたることから、ため池に加えて出水と呼ばれる自噴地下水脈の利用が盛んで、両者を併用した特徴的な配水網と厳格な水利慣行を伝えてきた。しかし、昭和50年の香川用水の通水によって、この一帯は三郎池の受益範囲に取り込まれ、農業用水確保の不安が払拭された反面、大池、長池等のため池が三郎池の子池となり、地元水源を核とした水利慣行が急速に消滅するとともに、ため池や出水の水源自体もその役割を失いつつある。

本書に報告する空港跡地遺跡は、香東川沖積地の東辺に位置し、春日川支流の古川の西方約400mに位置する。現海岸線から内陸に約5km、南南東約1.5kmに由良石で有名な由良山を仰ぐ。周辺は、旧空港施設を除けば田園地帯で条里地割をよく保存するが、旧空港南側から由良山の西にかけての一帯は昭和18年の軍用飛行場建設に伴う接収地を戦後解放して再区画された圃場であるため、条里地割とは異なった水田区画をなしている。



- | | |
|--------------|----------------------|
| 1 本遺跡 | 9 浴・長池遺跡 |
| 2 空港跡地遺跡 | 10 浴・松ノ木遺跡 |
| 3 拝師魔寺 | 11 林・坊城遺跡 |
| 4 上天神遺跡 | 12 東山崎・水田遺跡 |
| 5 太田下・須川遺跡 | 13 天満宮西遺跡 |
| 6 層石遺跡 | 14 松橋下所遺跡 |
| 7 井手東 I 遺跡 | 15 弘福寺領齋岐国山田郡田園比定地遺跡 |
| 8 浴・長池 II 遺跡 | 16 凹原遺跡 |

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡分布図（縮尺1/5000）

2 歴史的環境

現在知られている高松平野の遺跡は、その最古のもので縄文時代草創期であり、木太新池の池底（木太町）で有舌尖頭器が2点採集されている。しかし、縄文時代全般を通じて集落の存在は知られておらず、出土遺物の多くは自然河川からの一括遺物である。その中でも特に注目すべきは林・坊城遺跡（林町）で、晚期の自然河川中より木製農耕具が出土した。このことは、この近接地に集落の存在、並びにこの時期の農耕を想起させるものである。

弥生時代前期に入ると、浴・長池II遺跡（林町）の例のように規則的な水田を営むところも現れる。同様な水田は浴・長池遺跡（林町）、弘福寺領讃岐国山田郡田図比定地遺跡（林町）でも検出されており、これらは概ね弥生時代中期以前と推定されている。

本遺跡に南接する空港跡地遺跡（林町）が出現するのが弥生時代前期末である。この時期の遺構は自然河川と廐棄土坑及び貯藏穴の機能を有したと考えられる上坑、溝が存在する。また、遺物の出土はないが当該時期に属する可能性のある円形堅穴住居が検出されている。

中期に入ると回原遺跡（多肥下町）、浴・長池遺跡等で堅穴住居が検出されている。また、井手東I遺跡（伏石町）では当該時期の自然河川中より木製農耕具、弓、琴などが出土している。空港跡地遺跡では中期後半の遺構として溝状遺構・土坑が検出されている。

本遺跡の属する弥生時代後期になると高松平野における遺跡数は増加する。本遺跡周辺において多くの集落の存在が確認されており、中でも空港跡地遺跡においては大規模な集落が営まれていた。この時期の空港跡地遺跡の集落において注目すべき点は、この近接地にはほぼ同時期と考えられる墳墓域が存在することである。

弥生時代後期後葉から古墳時代前期にかけても空港跡地遺跡においては同様な傾向がみられる。ここで特筆すべきは当墳墓域において、規模は小さいながらも前方後円形並びに前方後方形周溝墓が造営されていることである。このことは比較的大きな勢力を持った首長層が当地に存在したことを想起させるものである。また、同時期の溝中より全国的にもあり例のない人形土製品が出土している。

高松平野中央部における弥生時代後期から古墳時代前期のその他の遺跡は、後期初頭の上天神遺跡（上天神町）、後期前半の太田下・須川遺跡（太田下町）、後期後半から末にかけての回原遺跡、天満・宮西遺跡（松縄町）が集落として知られている。また、浴・松ノ木遺跡（林町）において水田や権杖木製品が、居石遺跡（伏石町）においては弥生時代後期末から古墳時代前期初頭と考えられる3枚の小型仿製鏡がそれぞれ自然河川中より出土している。

古墳時代中期から後期にかけての遺跡数は少なく、太田下・須川遺跡で5世紀後半から6世紀前半の堅穴住居及び掘立柱建物、また空港跡地遺跡で5世紀末から6世紀初頭の集落が検出

された程度である。ここで注目すべきは、県内では明らかにされていなかった同時期の土器群が遺物包含層及び堅穴住居内で一括出土したことである。これによってこの時期の土器の資料が新たに提供された。

古代になると、数カ所で条里型地割と合致する主軸方位を採る溝が検出されている。

松縄下所遺跡（松縄町）では条里制施行に関連する可能性のある7～8世紀頃の幹線道路状遺構が検出され、太田下・須川遺跡では自然河川より平安時代の土器とともに斎車、人形、櫛が出土している。また、本遺跡から約200m南に拝師庵寺（林町）があり、ここで八葉單丸蓮花文軒丸瓦が出土したほか、七葉複弁蓮花文軒丸瓦も採集されている。

中世、近世においては古代からの大きな変化はそれほど認められない。この時期の集落の存在としては空港跡地遺跡、東山崎・水田遺跡（東山崎町）が知られている。

空港跡地遺跡では12世紀後半の溝状遺構や柵列で区画された小集落、13世紀代の約1町四方の区画溝をもつ集落、また18世紀代の遺物を含む、条里型地割と合致する1町方格の溝などが存在する。

東山崎・水田遺跡では堀立柱建物や井戸を検出したほか、近世の屋敷跡の可能性のある、溝状遺構に囲繞された堀立柱建物が検出されている。なお、本遺跡を含む空港跡地周辺は昭和19年の林飛行場造成に伴ってその地割りが大きく変化し、現在に至っている。

- (1) 丹羽佑一・藤井雄三『高松の古代文化』1989
- (2) 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター『林・坊城遺跡』1993
- (3) 高松市教育委員会「周辺部の調査 沼・長池Ⅱ遺跡」「讃岐国弘福寺領の調査」1992
- (4) 高松市教育委員会「沼・長池遺跡」1993
- (5) 高松市教育委員会『讃岐国弘福寺領の調査』1992
- (6) 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター『空港跡地遺跡発掘調査概報』1992・1993・1994
- (7) 高松市教育委員会「周辺部の調査 四原遺跡」「讃岐国弘福寺領の調査」1992
- (8) 高松市教育委員会「周辺部の調査 井手東Ⅰ遺跡」「讃岐国弘福寺領の調査」1992
- (9) 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター「上天神遺跡」「財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報 1988年度」（以下『センターワン報』という）1989
- (10) 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター「太田下・須川遺跡」「センターワン報 1989年度」1990
- (11) 高松市教育委員会「周辺部の調査 天満・宮西遺跡」「讃岐国弘福寺領の調査」1992
- (12) 高松市教育委員会「周辺部の調査 沼・松ノ木遺跡」「讃岐国弘福寺領の調査」1992

- (13) 高松市教育委員会「周辺部の調査 居石遺跡」『讃岐国弘福寺領の調査』1992
- (14) 高松市教育委員会「周辺部の調査 松縄下所遺跡」『讃岐国弘福寺領の調査』1992
- (15) 安藤文良「讃岐の古瓦図録」『文化財協会報』第8号 1967
- (16) 財團法人香川県埋蔵文化財調査センター『東山崎・水田遺跡』1992

第3章 調査の概要

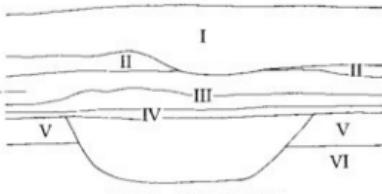
1 調査区の位置

昭和19年の林飛行場の建設に伴い、遺跡の所在する周辺は大規模な土地改変が実施された。戦後の土地変遷により旧高松空港を除き、再び水田となった。しかし、その区画は条里制地割の残存する高松平野とは異なる方向の水田となっている。遺跡はその異なる区画域の北東隅に位置しており、現況は旧耕作土の上に盛土した荒地である。現地表はこのため高くなっているが、周囲の地形は東方向にしだいに低くなっている。



2 基本層序（第3図）

調査区全体の土層堆積は、ほぼ平坦な堆積で6層に分層することができる。現地表から約40cmまでは花崗岩による盛土（第3図第1層）であり、部分的に深く入り込んでいる。その直下には厚さ約20cmの黃灰色シルト質極細砂（同図第2層）が存在する。旧耕作土である。その下は灰白色シルト質極細砂と浅黄色シルト質極細砂（同図第3層）が交互に数枚堆積している。これは土壤層と非土壤層であり、遺物の出土はないが、その堆積状態や色調より考えると近世の条里型水田層であろう。調査区西半には薄く灰褐色シルト質細～極細砂（同図第4層）が堆積しており、小規模な袋状洪水であると考えられる。第3層と第4層の下は褐色シルト質細砂（同図第5層）であり、遺構はこの層上面より検出される。最下層は、黄色極細砂質シルト（同図第6層）であり、高松平野に共通してみられる基盤層である。



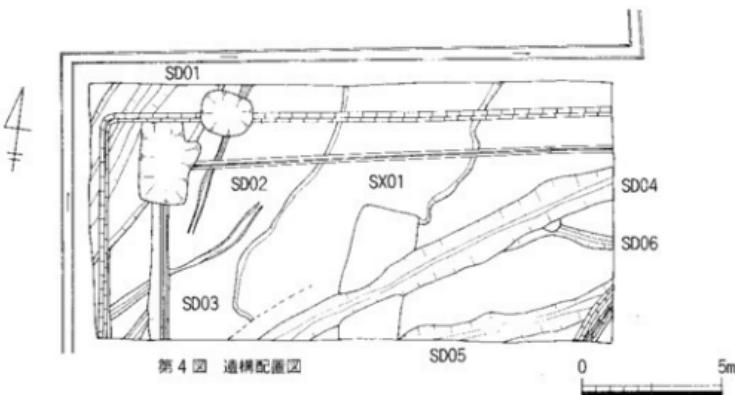
第3図 土層断面柱状図

- I 盛土
- II 黄灰色シルト質極細砂 (2.5Y 6/1)
- III 灰白色シルト質極細砂
- IV 浅黄色シルト質極細砂 (5Y 7/1・5Y 7/4Fe)
- V 灰褐色シルト質細～極細砂 (7.5YR 4/2)
- VI 黄色極細砂質シルト (2.5Y 8/6)

3 遺構・遺物

(1) SD01（第5図）

調査区北東隅において検出された。2ヶ所の擾乱によって切られており、旧高松空港に伴う



第4図 遺構配図

埋設溝が上部に設置されている。溝の方向は北北東-南南西を示す。幅は約3.80mを測り、最深部の深さは約50cmである。溝は第5層上面より検出され、底面は基盤層を掘り込んでいる。掘り込みは二段掘りであり、上面より約20cm掘り込んだところで一段平らになり、溝中央やや西寄りで急激に落ち込んでいる。その部分の幅は約1.10m、深さ20~25cmをはかる。底面のレベルは南から北に向かって徐々に低くなっている。水は南から北に流れていると考えられる。埋土は2層であり、浅い部分が褐灰色シルト質極細砂、中央の最深部は黒褐色シルト質極細砂である。溝の全面より遺物の出土が見られた。

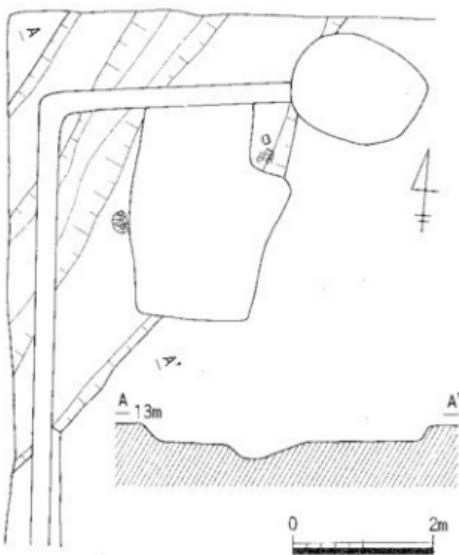
出土遺物（第6図）

(1)は広口壺であり、口径は17.2cm現存高6.4cmを測る。若干内傾気味に直立する頸部から口縁部が屈曲して大きく広がる。口辺部内外面は横ナデが施され、頸部内面には指頭圧痕が見られる。外面は磨耗が著しいため整形は不明である。胎土には白色・黒色細砂粒を密に含み、1~4mmの小石粒を若干含み、焼成は良好である。色調は明赤褐色(2.5YR5/6)である。

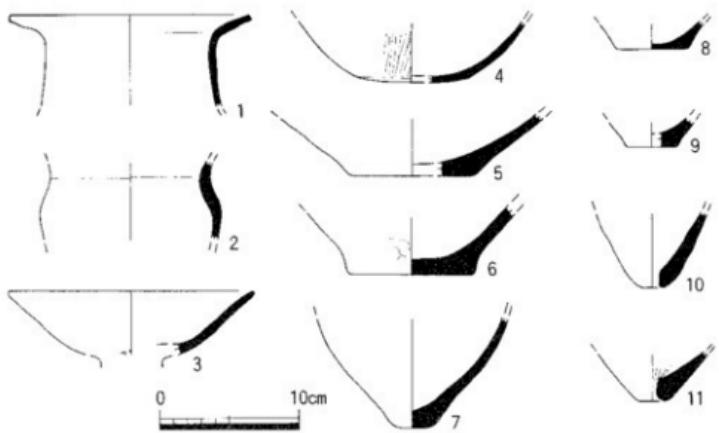
(2)は壺の頸部から胴部上部である。内外面とも磨耗が著しく整形は不明である。胎土には白色細砂粒、2~4mmの小石粒を含み、焼成は良好である。色調は灰白色(5Y7/1)である。

(3)は高壺の壺部である。推定口径は17.6cm、現存高は9.5cmを測る。わずかに残存する壺底部から口縁部がほぼ直線的に大きく開く。内外面とも磨耗して整形は不明瞭であるが、外面下位に若干のヘラミガキが見られ、内面にはナデが施されている。胎土には白色・黒色細砂粒を含み、焼成はやや良好である。色調は淡黄色(2.5Y8/4)である。

(4)~(9)は底部である。(4)は丸底気味であり、推定底径は8cmである。外面はヘラミガキ、内面はナデが施される。胎土には白色・黒色細砂粒を密に含み、1~3mmの小石粒を若干含む。焼成は良好、色調は灰白色(10YR8/2)。(5)は推定底径9cm、胎土には細砂粒を密に含み、1~4mmの石英、小石粒を含む。焼成は良好、色調は内面褐灰色(10YR4/1)、外側黒色(10YR2/1)である。



第5図 SD01実測図



第6図 SD01出土遺物実測図

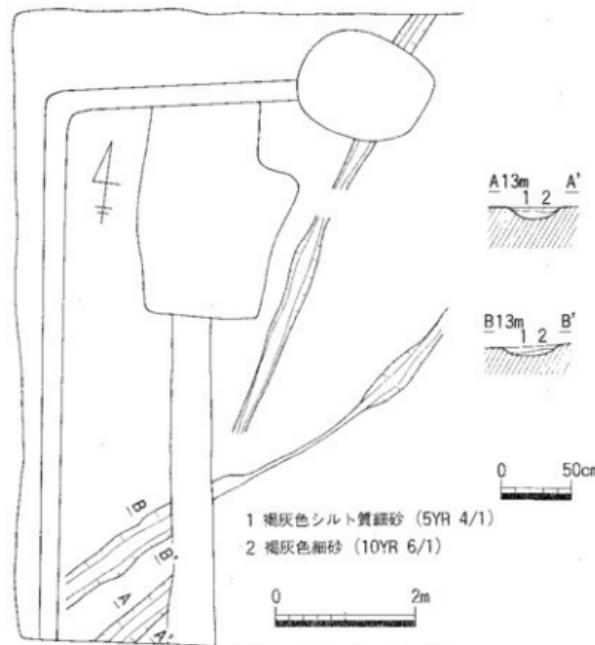
R2/1)である。(6)は底径9cmを測り、整形はナデである。胎土には細砂粒を密に含み、1~3mmの石英、小石粒を若干含む。焼成は良好。色調は灰白色(2.5Y8/1)。外面半分に黒斑が見られる。(7)は底径3cmを測り、内外面ともナデが施されるが外面は腐耗が著しい。底部は未整形である。胎土には白色・黒色細砂粒を含み、焼成は良好。色調は灰白色(7.5YR7/1)。(8)は底径5.4cm、胎土には白色細砂粒を密に含み、焼成は良好。色調は内面にぶい褐色(7.5YR5/4)・外面灰褐色(7.5YR4/2)である。底部には黒斑がある。(9)は底径3.6cm、胎土には白色細砂粒を若干含み、焼成は良好。色調は灰白色(10YR8/1)である。

(10)、(11)は瓶底部である。(10)は推定底径1.6cm、孔径1cmである。胎土には白色・黒色・茶色の細砂粒、1~2mmの小石粒を含み焼成は良好。色調は灰白色(2.5YR8/2)である。外面に黒斑が見られる。(11)は底径2cm、孔径0.6cmであり、胎土には白色細砂粒を若干含む。焼成は良好。色調は灰白色(5YR8/2)を呈す。

(2) SD02(第7図)

調査区の西側でSD01とほぼ同方向に検出された非常に細い溝である。幅は約30cm、深さ5cmを測る。SD03との交差部付近は消失しているが、南側で再び検出された。埋土は上層が褐灰色シルト質細砂、下層が褐灰色細砂となっている。底面のレベルは南から北になるにしたがい低くなっている。SD03によって切られている。

遺物の出土は非常にわずかであり、図示できるものはなかった。



第7図 SD02・03実測図

SD03はSD02より若干新しいと考えられる。

遺物の出土は非常にわずかであり、図示できるものではなかった。

(4) SD04 (第8図)

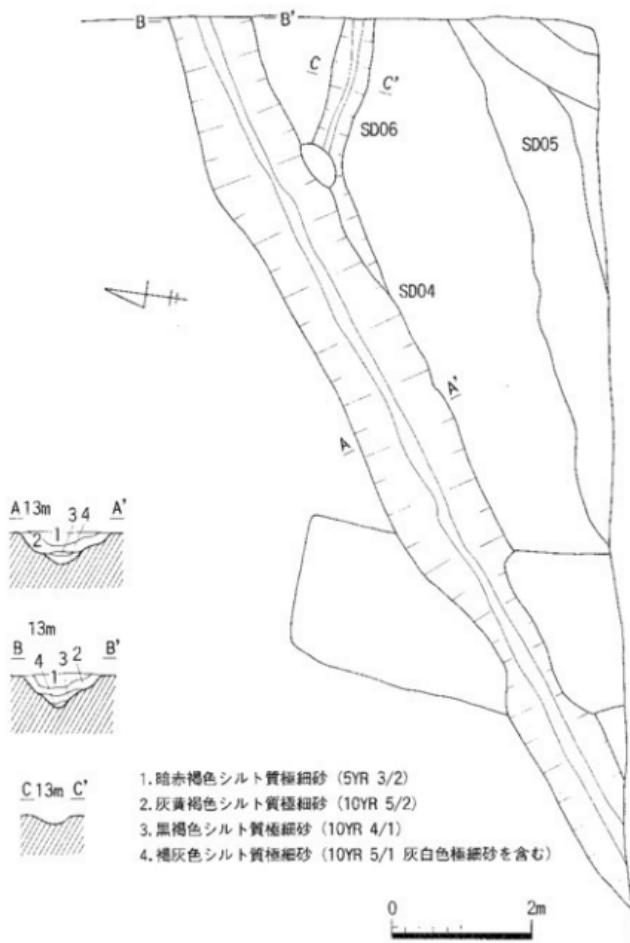
調査区南壁中央から東壁中央にかけて東北—西南方向に検出され、SD05とほぼ平行に走っている。検出された全長は14mであり、幅は1.40m、深さ50cmを測る。断面はU字形を呈し、底面は20cm未溝で非常に狭くなっている。埋土は上層より暗赤褐色シルト質極細砂、灰黄褐色シルト質細砂、黒褐色シルト質極細砂、褐灰色シルト質極細砂であり、最下層には灰白色細砂を多く含んでいる。底面のレベルは北方になるにしたがい低くなってしまっており、その比高差は5cmである。底面および側面下半には水の流れの影響によるえぐれが多数存在しており、水の流れが著しかったと想像することができる。検出された溝の南側では北岸に若干の高まりが検

(3) SD03

(第7図)

調査区の南西側において検出された。溝の方向は北東—南西で、非常に小規模な溝である。幅は40cm、深さ5cmを測り、検出された溝の中央付近では掘り込みが消失しており、底面のみが残存していた。北端は消滅しているが、本来は北東方向にのびていたと考えられる。底面のレベルはほぼ平坦である。埋土の上層は褐灰色シルト質細砂、下層は褐灰色細砂である。SD02を切っており、

出され掘削された土を積み上げたものと考えられる。この溝はSD06、SX01を切っている。遺物の出土は少なく、底面近くからの出土は全く無く、ある程度埋没した後にわずかな土器が放棄されたと考えられる。



第8図 SD04・06実測図

出土遺物（第9図）

(1)は甕である。推定口径は17.6cmを測り、口縁部が強く屈曲している。口縁部は内外面とも横ナデが施され、胴部は磨耗のために整形は不明である。胎土には黒色・白色細砂粒を密に含み、1~3mmの小石粒を若干含む。焼成はやや良好、色調は灰黄褐色(10YR 6/2)である。

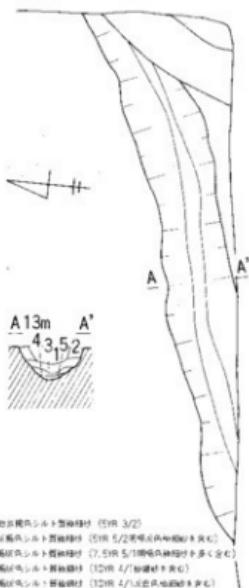


第9図 SD04出土遺物実測図

(5) SD05 (第10図)

調査区の南東隅で検出され、SD04の南側にほぼ平行してのびている。溝の北東端は旧高松空港に伴う埋設溝と土管によって切られている。断面U字形を呈するが、底面は非常に狭い。底面のレベルは、南西から北東に低くなっている。その比高差は10cmである。埋土は大きく3層に分けられ、上層より暗赤褐色シルト質極細砂、灰褐色シルト質極細砂、褐灰色シルト質極細砂である。さらに下層の褐灰色シルト質極細砂は3層に細分され、底面直上には褐灰色極細砂が堆積している。底面付近には水の影響によるえぐれが見られる。

遺物の出土はわずかな土器片にすぎず、その出土状態はSD04と同様である。



(6) SD06 (第8図)

調査区東側においてSD04より派生する溝である。幅は約40cm、深さ5cmを測り、非常に小規模な溝である。底面のレベルはほぼ平坦である。埋土は褐灰色シルト質極細砂である。

遺物の出土はわずかであり、図示できるものはなかった。

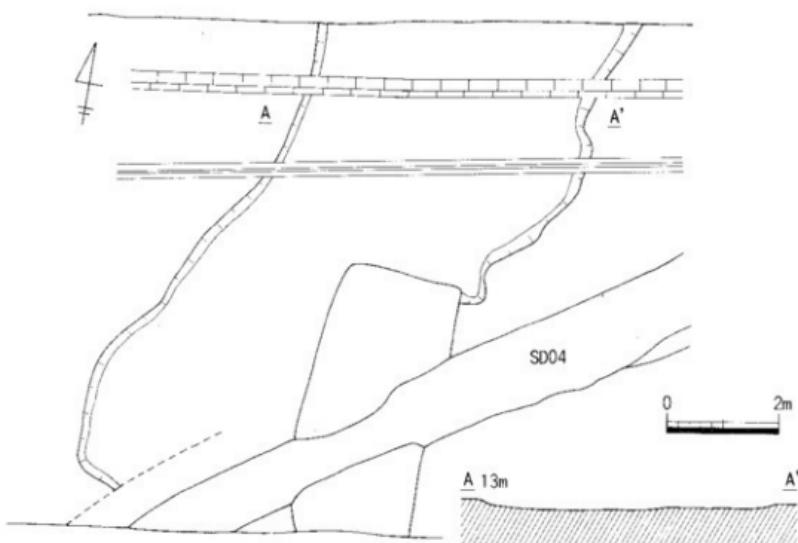
(7) SX01 (第11図)

調査区ほぼ中央に検出された帶状の不整形な落ち込みである。南端部はSD04によって切られている。掘り込みの深さは5~10cmである。底面はほぼ平坦であるが、中央部がやや凹んでいる。埋土は褐色シルト質極細砂である。

遺物の出土は多く、全域にわたっている。



第10図 SD05実測図



第11図 SX01実測図

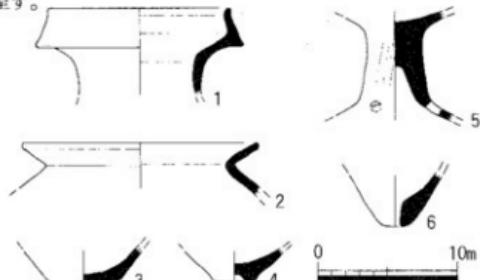
出土遺物（第12図）

(1)は複合口縁の壺である。口径は13cmを測り、頸部が緩やかに外反し、口縁部で強く折り返して内傾する。口縁部は内外面とも横ナデが施され、頸部は磨耗が著しいが外面の一部にヘラ削りが見える。胎土には白色・茶色細砂粒を密に含み、2～4mmの小石粒を若干含む。焼成は良好、色調はあさ黄色(2.5Y7/4)を呈す。

(2)は壺であり、推定口径は17cmを測る。頸部から口縁部は強く屈曲し、内外面とも磨耗が著しく整形は不明瞭である。胎土には白色細砂粒、3mm位の小石粒を含み、焼成は良好。色調は灰白色(10YR8/1)である。

(3), (4)は底部である。(3)は底径4.8cmを測り、胎土には白色細砂粒を密に、1～2mmの小石粒を若干含み、

焼成は良好。色調は内面明黄褐色(10YR6/6)、外面灰褐色(7.5YR5/2)を呈す。



第12図 SX01出土遺物実測図

外面に黒斑が見られる。(4)は底径3cmを測り、底部中央に断面V字形の凹みがある。胎土には白色、茶色細砂粒を含み、焼成は良好。色調は浅黄橙色(10YR8/3)を呈す。

(5)は高坏であり、坏部と脚裾部を欠損する。脚部に孔3個を有す。磨耗のため整形は不明瞭だがわずかにヘラ削りが見られる。胎土には細砂粒、2~5mmの小石粒を含み、焼成は良好である。色調は橙色(2.5YR7/6)を呈す。

(6)は瓶底部である。底径は2cm、孔径は1cmを測る。胎土には細砂粒を若干含み、焼成は良好である。色調は灰白色(10YR8/2)を呈す。

(8) 近代の遺構(第4図)

旧高松空港に伴う施設として、コンクリート製埋設溝と鉄製管、土管が検出された。コンクリート製埋設溝は2本1対となり、調査区西壁と東壁に沿ってL字形に検出されたものと調査区南東隅のものと2ヶ所検出された。埋設溝はU字形断面の本体と蓋から成り、長さ50cm、幅高さ15cmのブロックをつなげている。溝の内部にはケーブルがあった。鉄製管は埋設溝と同様にL字形に検出され、2本1対となっている。土管は南東隅の埋設溝の下方に検出され、2本1対となっている。土管1個の長さは約50cm、径約10cmである。

第4章 まとめ

本遺跡を含めた旧高松空港周辺は、昭和19年に陸軍飛行場となり大規模な土地の改変が実施され、現在でも高松平野に残存する条里地割とは異なった土地区画となっている。本遺跡は、改変された部分の北東に当たる位置に存在するため、調査以前には遺構がすでに壊されているのではないかと懸念された。しかし、平成3年度から実施された空港跡地遺跡の発掘調査では弥生時代前期から近代までにいたる集落、溝、墳墓、水田、井戸等が非常に多数検出されており¹⁾、土地の改変が地面深くにまで達しておらず、旧地形が残っていることが明らかになった。

本調査により検出された遺構は、溝6、性格不明の遺構が1であり、すべて弥生時代後期後半に属すると考えられる。溝はその規模から大小2つに分けられる。大きな溝はSD01、04、05であり、小はSD02、03、06である。前者の中でSD01は遺物の出土が多いのに対し、SD04、05は遺物が少なく流水によるえぐれがある。これはSD04、05は水がある程度の速度で流れていたことを表している。すべての溝は自然地形に沿って南西から北東方向に徐々に下がっている。これらの溝の用途に関しては、調査面積が非常に狭いため解明できなかったが、前述した空港跡地遺跡と大きな関連があるのだろう。正式な報告書の刊行を待ちたい。

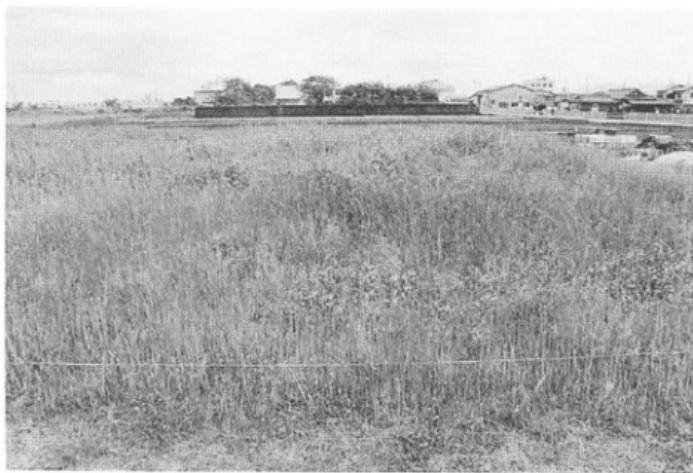
1) 香川県教育委員会・嶋香川県埋蔵文化財調査センター『空港跡地遺跡発掘調査概報 平成3～5年度』1992年3月、1993年3月、1994年3月

図版





遺跡遠景（調査前）



遺跡近景（調査前）

図版2



遺構検出状況



発掘作業風景



SD01完掘状況



SD02・SD03完掘状況

図版4



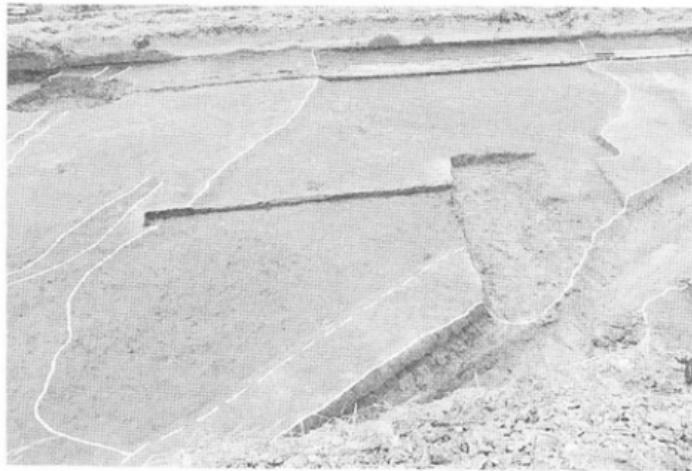
SD04～06完掘状況



SD04～06完掘状況

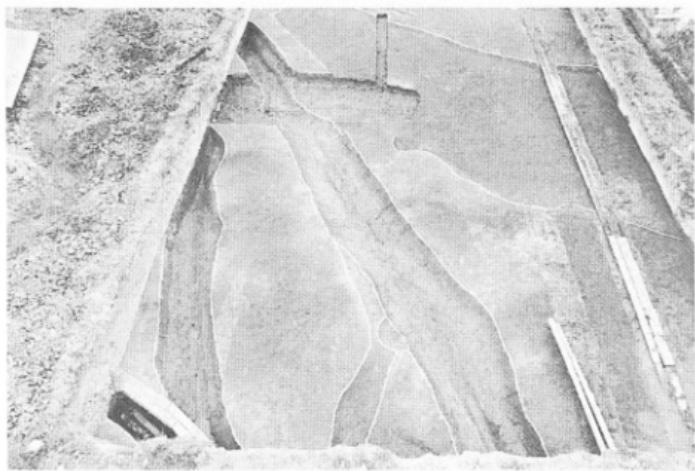


S005完掘状況



SX01完掘状況

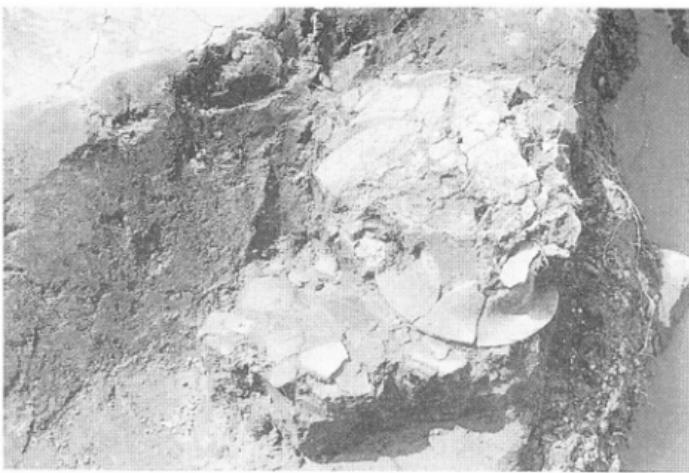
図版6



遺跡完掘全景（東から）



遺跡完掘全景（北から）



SD01遗物出土状况



SX01出土遗物

SD01出土遗物

報告書抄録

ふりがな	くうこうあとちいせきかめのまちちく						
書名	空港跡地遺跡(亀の町地区I)						
副書名							
巻次							
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	第25集						
編著者名	山本英之 中西克也 松田重治						
編集機関	高松市教育委員会						
所在地	〒760・香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL.0878・39-2636						
発行年月日	西暦 1995年1月31日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
空港跡地遺跡 (亀の町地区 I)	香川県高松市 林町 2222-2		34度 17分 40秒	134度 4分 50秒	19940514～ 19940622	175.75m ²	日本電信電話株式会社 高松市林町 RT設置工事に伴う事 前調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
空港跡地遺跡 (亀の町地区 I)	集落	弥生時代 後期	溝 6	弥生土器			

空港跡地遺跡

—高松市林町町(加入者線多量伝送装置)設置に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

1995年1月

編集発行 高松市教育委員会

印 刷 高東印刷株式会社